

	記	述	目	録	
		落	穂	拾	い

日常使っている言葉のなかに、「三寒四温」「四面楚歌」「四苦八苦」「無くて七癖」「八面六臂」「七里ヶ浜」「九十九里浜」などのような名数が沢山あるが、名数の読み方については、参考書があるので、読み違いはないであろう。それにひきかえ、「1975年農業センサス結果報告」や「わかりやすいC400形クロスバ」のように書名中に数字を添えたものがあるが、書名のなかで普通に使われている数字は、読み方が幾通りもあるので、不統一が生ずることがある。

\*

国立国会図書館では、標目（書名、著者名など）中の数字の読み方を次のようにきめている。

数字の4, 7, 9は不自然でない限り、それぞれ「シ」「シチ」「ク」と読むことにしている。たとえば、「四十八歳の抵抗」は「シジュウ ハッサイ ノ テイコウ」であり、「一九四七年の旅」は「センキュウヒャクシジュウシチネン ノ タビ」である。ところが、読み方を統一することによって、珍奇なものが出てきている。「小型四輪車の構造」が「コガタ シリンジャ ノ コウゾウ」である。数字の「シ」「シチ」「ク」の読み方になじめない昭和生れの現代っ子は、しばしば統一を欠いている。

つぎに、「10代」「100代」「1,000代」は、1を読まないで、「ジュウダイ」「ヒャクダイ」「センダイ」と読む。しかし、漢字で「一十」「一百」「一千」とあるものは、それぞれ「イチジュウ」「イッピャク」「イッ

セン」と読むことにしている。たとえば、「一千万円の財産づくり」は「イッセンマンエン ノ ザイサン ズクリ」であるが、「1,000万円の財産づくりの本」は「センマンエン ノ ザイサン ズクリ ノ ホン」である。読みをローマ字で表記している当館では、初字がIとSになるので、同じところには並ばない。レファレンスを電話で受けるとき、この類のものには、とくに注意を要する。

紙幅の関係で、ここでは詳しくとりあげられないが、漢字についても統一した読み方をしている。2, 3の例をあげると、当館の場合、「茶道」は「サドウ」ではなく「チャドウ」, 「私」は「ワタシ」ではなく「ワタクシ」, 「明日」は「アシタ」でも「ミョウニチ」でもなく「アス」である。日本語の特性から幾通りにも読み方のできる語については、目録をひくときは、注意してほしい。

\*

長い歴史のなかで積み重ねられた目録は、時流の変化に、即対応しにくい。さきあげた数字の読み方にしても時流に即しているとはいいがたい。それに“四輪車”の読み方のような珍奇なものが、いつまでもそのままになっている。また、漢字の読み方にしても、「チャドウ」のような現代風な読み方にそぐわなくなってきたものもでてきている。

ところが、数字などの読み方が多少時代にそぐわなくなってきたからといって、簡単に何百万枚もある目録カードを点検し、訂正できないところに図書館の悩みがある。これらを図書館の「無くて七癖、有って四十八癖」の一つとみるならば、悩まないですむかも知れない。

(収集整理部 上河辺定利)